

幼児はなし



すれていきます。だからこの時代にお話をきいた感激、劇をみた感激をこわしたくないと思います。科学的な説明は、小学校へ入ってからでもよいのではないでしょうか。

○おとなになつても残る話を

石井桃子氏のお宅をお訪ねし、幼児とお話についていろいろ御意見を伺いました。

○子どもの感激を大切にしたい。

ある先生から、子どもに劇をやらせて劇がすんだあと、はつぱはどうなつているかしら？ うきぎはどうしたの？ などと子どもにいろいろ質問をする、ということを伺いました。それでは劇をみた子どもの感激が、めちやめちやにこわされてしまふのではないかと申しあげたのです。子どもの感情はたいへん豊かです。毎日新しい世界にぶつかって感激して生きているのです。大きくなるにつれ、この新しい世界にぶつかる感激がう

ある先生が集団の中で行儀をよくするとか、みんなに迷惑をかけないとかいう「しつけ」をする前にもつとこの時代に味わわせておきたいことがあるようと思う、とのべておられましたが、幼児にお話をする場合、明日から役に立つことばかりではないのではないかと思ひます。幼児はある程度驕いだり、けんかをしたりでいいのではないか、すぐ効果のある話は、おとなになつてもよい話として残り得ないと思ひます。おとなになつても残っている話は、文学的に価値があり、その人の人生を豊かにします。

○幼児の善悪の考え方

「カチカチ山」の話は、おとなからみたら勸善懲惡ですが、子どもはそうはとりません。「ああ、おもしろい。」と感じるだけです。おとなになれば、一人の人の心の中に善と惡の両方があることを発見しますが、子どもはおとなのようには考えません。おとなは今までの経験に照らして惡というものを考えますが、子どもにはその経験がありませんから、「隣りの人の物をとる人」と、目に見える形で惡を示さなければわかりません。おとなと子どもは違うのです。ほんとうにその子どものために

なるから、子どもにお手伝いをさせるのだと考へてゐる人がいるでしょか。たいていはおとなの方の便利のために子どもを使っています。共同生活のため、みんなに迷惑をかけないため、ということは結構なことです。それならおとな自身も、共同生活を楽しむなければならないと思います。

○美意識の確立

大きくなつてから「これが美しいもの」と示されても、それで美意識は確立しません。くもの巣に露がたまっている、子どもがそれに接するとき、「ああ、すばらしい。」と、全宇宙がそこに入つてしまつたかのような感激をもつて眺めるのです。感覚的豊かさがあるのです。この豊かな子どもの時代に、よいものを持ち去る必要があります。田舎の美しい自然の中に育つても、美意識を育んでくれる人がいないと「美しいもの」といったら、岡田茉莉子さんの絵しかないと思うようなおとな、またマチスの絵をみたら、ひんまがつた絵だとしか思わないおとなになります。

お話をきいたらおもしろいという感覚は、子ども時代には、わりに平等にどの子どもにも与えられています。ですからできるだけ美しいもの、すばらしいものを子どものまわりにころがしておくことが必要です。

○昔ばなしはすばらしい芸術品

昔ばなしは、昔の人が生み出したたいへんすばらしいもので

す。いくら研究しても研究し足りないものです。

日本は国が小さいし、他国との文化の交流がなかつたので、昔ばなしは非常に少ししかありませんが、ヨーロッパのようにいろいろな国の文化が交流したところでは、グリム童話のように、子どもがわかるよい話がたくさん生み出されました。これらの話は、自然発生的に大勢の人が生み出したものです。子どもたちにわかる手段とは、具体的に形をつくり出すことで、この具体的な形が組み立てられて話を構成しています。悪いおじさんという抽象的なではなく、どんなことをしたおじさんと具体的に描かれています。

よい話は一人や二人ではできません。大勢の民族がよつてたかつて一番よいものを生み出したのです。これは子どもからおとなまで、知能の低い人から高い人まで、だれでもがわかるはなしです。こういう話は、一人の天才が出てもとてもできることがではありません。

また、外国では図書館がたいへん発達しています。日本のように受験生だけが行くところではなく、一般の人が行くところです。この図書館に、六十年、七十年前に五つだった人が読んでおもしろかった本がちゃんと残されています。百人のうち七十人の人に喜ばれた本がとつてあるのです。今の子どもがおじいさんが五つのとき読んだ本を読めるのです。ですから、子どもに新しい話をつくりたい人はこれを研究して、どんな話を子

どもに喜ばれるか知つてかきます。

○具体的で筋（プロット）がある話

五分間の話をきくには、五分間の集中力が必要ですが、それがきけるようになると、次に十分の話がきけるようになります。

そうすればたばたしなくなります。おもしろくなればついでます。鳥が口をきくという話は幼児時代に経てくるべきで、小学生になってから聞いて、「なんだ想像だ。」とおもしろくありません。幼児にはいくら話をきかせてもきかせ過ぎるということはないと思います。外国には五才なら五才の話のコレクションがたくさんあります。日本にはそういうものがあります。

子どもの話は具体的であることと、筋があることが必要です。イギリスの三才と四才の子のお話にこんなのがあります。

・「生まれたばかりのスズメが母スズメからとぶ練習をしてもらいます。母スズメがつたから生垣までとぶ練習をして、とべたら今日は終りですよといいます。母スズメのいう通りにとんでみると生垣までとべました。なんだやさしいやと子スズメはどんどん先までとんで行きました。とうとう子スズメは疲れて休むところはないかと探します。子スズメが『中へ入れてくださいな。』といふと、

黒いトリは『カオーカオーっていえるかい。』とききます。『チュンチュンしかいえません。』などと『そんなら仲間じゃないからだめ。』と入れてくれません。また子スズメがとんと行くと灰色の巣があつてトリがいます。『入れて。』などと『コロッポ、コロソボとなければいい。』とききます。『チュンチュンしかいえません。』といふと、また『仲間じゃないからだめ。』といわれます。スズメが今度は下へさがつて来ると葦の間の巣に茶色のトリがいます。『入れて。』『カソカソカソカツカといえるかい？』（カモ）『チュンチュンしかいえません。』『じゃ仲間じゃないからだめ。』とまたことわられます。夕方になりもう子スズメはとぶことができなくなつて歩いていますと、向うからトリがとんで来ました。『チュンチュンしかいえませんけど仲間じゃありませんか。』ときくと、『もちろん仲間ですよ、おかあさんじやありませんか。』といって母スズメは子スズメを背中へのせ、おうちへつれていってくれました。

一つ一つの鳥にちゃんと性格があります。そしてどうしてよいかわからない、せつぱつまつたときに助けられるという筋があります。『どうなるかなあ。』という条件がないと、子どもはきいてくれません。

おとなと違つて子どもにとつて「文学」は、はつきりと他の

部分と分れていません。生活の中の楽しいことなのです。完備した文学を与えるされると、子どもは考えの整理をつけたり、因果関係をたどることを覚えます。文学には筋や論理がありますから昔の人は一つの話によって教訓も得たでしょうし、楽しむこともしたでしょうし、いろいろなことをしました。子どもの話には子どもにとっての大事件が必要です。スヌメ（主人公）の中に自分を入れて考えているのですから、事件のある話と、ない話とでは、きいたあととの子どもの反応が全く違います。事件のある話では「ああ——」と子どもは心底から満足し切った様子を示します。

二才半の子どもには毎頁筋のない「花が咲いています、鳥がとんでいます。」といった絵本でもいいでしょですが、三才の子どもには筋のある話が必要です。遠まわりのようだけどいろいろなことを説明してきかせるより、話をきかせた方が考える力がつくと思います。

○よいお話を完璧な形でくり返し与えよう

日本では、戦後、昔話は古いといわれているけれど、そんな国は世界のどこにもありません。外国では今でもみんな昔話をきいて育つのです。日本の昔話をきかないで育つということは、伝統をとび越えて育つことで好ましいと思いません。いい一寸法師、いいサルカニをきかせて、らんなさい。力があります。巖谷小波が書いた頃は立身出世に結びついてかかれたので

すが、いろいろな出版社からでている昔話をよんでも、その中でよいものを与えたいと思います。グリムの中に首がちぎられたりする話がありますが、子どもはおとながきくようには残りません。

わたしは小さいとき、「七匹の小山羊」の狼のおなかへ石をつめるところを、「ああおもしろい。」と思ってきましたが、このおもしろさは子どもの時代にしかわからないことです。大きくなつてからよんだらあの感激はありません。

○子どもの文学的才能を発見しそれをのばすには？

子どもをみてもわかりません。子どもによいお話を、完璧な形で繰り返し繰り返しきかせる、そして子どもがそれにうつをぬかす、すると、子どもは質に対してもがつちりしたものつかむようになります。小さいうちにしこむのです。子どもに天分があればそこを土台にしてかき出すようになります。何もないところから生まれてきません。どの子に天分があるのかわからぬのですから、子どもにできるだけたくさんよいものを与えることが必要です。

○アンゼルセンのお話を幼児にはむずかしい

それは、アンデルセンという個性のある人がつくったお話だからです。話に自然、個性がでており、主人公の気持の表現などがありますから、その個性をのみこめる年令にならないとわからないと思います。小学生になってからでしょうね。グリム

は特定の人がつくったのではありませんから、個性をのみこめない幼児にもわかります。

○感情表現について

幼児は「悲しい」「うれしい」ということばに対しても想像が困難です。「おじいさんは大喜びした。」といつてもわかりません。日本人はこれをまちがえて、感情表現のことばをよく使います。おじいさんは宝物をもらいました。」というと、喜んだなどといわなくても「ああうれしかった。」と子どもにわかるのです。自分がもらったときのことを想像するからです。昔話は伝承文学ですから、きいている人が喜ばないと言が成り立たなかつたのです。大勢の人がきいて喜んだ話が今も残つてゐるのですから、すばらしいものばかりです。これらには「おじいさんは宝物をもらいました。」と具体的に表わされています。幼稚園の先生はグリムなどのお話を、多くの出版社の中からよいものを選んで、よく練習してから子どもに与えてほしいと思ひます。

○話をきかせた後五分間は何も言うな

アメリカでは story telling といって、話をきかせた後五分間は何もいうな、といふことがいわれています。それは話をきいた後の子どもの感激をこわさないために、その話について「何がでてきたの?」「それからどうしたの?」などと質問したりしないで、そつとしておくという意味です。すぐ質問したの

では感激をぶちこわします。またいふ話をきかせるときには、話の途中で「それからどうなると思う?」などと問い合わせることは禁物です。それも話のぶちこわしです。昔話は幼稚園の先生よりずっとずっと立派な芸術家(民族)が長い年月かかってつくったものですから、そういうことをしないで、どんどん話をすすめた方がいいのです。今つくったような話には問い合わせがあつてもよいし、そういう形式で話をすすめることもいいでしょう。

○幼稚園の先生方に是非お願ひしたいこと

現在日本の幼稚園の先生方は、自分の経験のみをなしくして話をしています。これなら確かに幼児が喜ぶというお話をわざつていません。どうして今まで集められなかつたのでしょうか。そこで、よい話を選んで、繰り返し繰り返し練習して幼児にきかせ、子どもがおもしろがつたらどういうところでおもしろがつたか記憶し、一つずつでも、こういう話なら確かに子どもが喜んでくれるという話を、後の人のために残してほしいと思います。そうすれば、後から来る人はたいへん楽でし、新しく子どもの話をかく人にも勉強になります。外国には五分間の話を探したいと思つたらたくさんコレクションがあります。そういう国で育てられた子どもは幸せです。それは子どもにとつてすばらしい財産です。